

第90回山口西田読書會（2015年10月3日）
前回（2015年9月26日）のプロトコル（田中）
出席者：佐野、桑原、奈原、岡部、南部、藤川、田中（7名）
テキスト：西田幾多郎『善の研究』

担当：田中

1. これまでの読書会の経過について（佐野先生）
概略が佐野先生から説明され、第一編と第二編との関係について、第一編は、第二編への哲学思想の仲介的役割を果たしているとの指摘がなされた。
2. プロトコル作成のポイントについて（佐野先生）
以下を柱にして簡潔に作成したらいい。
 - ①議論の要約
 - ②当日学習した本文の要約
 - ③自身の哲学的問い作成は、その日の内に行うことが望ましい。人間の記憶には限界がある。
3. 岡部氏のプロトコル報告
4. 岡部氏のプロトコル報告を受けて、佐野先生から改めて第一編第3章「意志」第1段落～第3段落について、概略以下のような説明がなされた。
第1段落、第2段落は、意志の性質が論じられ、第3段落では「知」と「意」の関係を論じている。
第1段落 「意志」が精神現象であり、純粹経験である、ということが書かれている。
第2段落 「意志」とは、「注意を向けること」という定義づけがなされている。これに対しては、「それでは範囲が広すぎるのではないか」という反論がなされる、ということから、
第3段落 「知識表象」と「運動表象」が同じものであるということを、いくつかの反論を対置しながら論じている
5. 岡部氏の哲学的問いについての意見交換
純粹経験において、個々の悩みや絶望の内容はどのような意味を持つか？
絶望の淵にあり、それ以上前に（統一に）進めないような人間（人生の落伍者）の生き方については、西田哲学は対象としていないのか？
佐野先生からは、人が絶望に至ったとき、どうにもならなくなったとき、そこに宗教的要求が生まれる、というのが西田哲学の方向性である、との示唆があった。
議論は、西田哲学が人生の悩みにどう対応しているか、という方向にも進んだ。
絶望から生き延びるために大切なのはエゴを捨てることだという意見も出た。
岡部氏からは、絶望の淵に立たされた人の「悲しい響き」も「喜びの響き」も受け取る側からすれば同じものか、という問いかけがあった。
議論に結論はなかった。
6. 本文の読み進め
第一編第3章「意志」第4段落 後半部の文章「我々は或いは意志的運動においては」から同段落最後までを読み進めた。
自己の身体の運動と外界の物体の変化の関係
自己の身体も、外界の物体も、物体である
視覚(目で見え)外界の変化を知ることと、筋覚(体内の筋力の動き)で自己の身体の運動を感ずることは同一 外界の変化も、自己の身体の運動も(われわれから見れば)外界である。
(にもかかわらず)自己の身体だけは、自己の自由になると考えるのか？(外界の変化はどうにもならないが)

原始的意識の状態では、自己の身体の運動と外物の運動(外界の変化)とは同一
(←主客の分離がないから)
→経験の進化(統一作用)で両者が分化(cf第3段落)
種々の約束の下に起る者が外界の変化
予期的表象にすぐに従う者→自己の運動
(しかし)この区別は絶対的ではない
自己の運動であっても必ずしも予期的表象にすぐに従うことができるとはいえない(思ったことがすぐに行動に移せない場合がある)
→この場合、意志の作用は知識の作用に著しく接近(cf第3段落)
外界の変化といっているもの→我々の意識界、即ち純粹経験内の変化
(外界の変化に関する)約束の有無→程度の差
→知識的実現と意志的実現とはつまるところ、同一性質
(従って、自己の身体だけは、自己の自由になると考えるのは正しくない。自己の身体の運動も外界の変化も我々の意識界、即ち純粹経験内の変化だ)
反論⑥意志的運動においては、
(知識的なる)予期的表象は単に意志的運動に先立つのではなく、
そのもの(知識的なる予期的表象)が、直ちに(意志的)運動の原因になるが
外界の変化においては、
知識的なる予期表象そのものが、(外界の)変化の原因となるのではない
(例:木の葉がひらひらと落ちてきたとしても、それは私の意志ではなく、自然の出来事だ～藤川さんの指摘)
したがって、両者(外界の変化と身体の変化、意志的運動と知識的運動、知と意)は異なる
西田 因果→意識現象の不変的連続
意識を離れて全然独立の外界があるとすれば、反論の通りであろう。
意志的予期表象の「運動」に対する関係＝知識的予期表象の外界に対する関係
意志的予期表象と身体の運動→必ずしも相伴わない
→ある約束のもとに伴う(この点で、外界の変化と同一である)

7. 哲学的問い

西田哲学では、生きがいはどうとらえているのか？人は現在の自分の状況の中で、生きがいを見出し、その実現に向かって頑張っている。そのために、周りの環境を変える努力をしている人もいる。このような人々をどうみているのか？このような人々にどのような言葉をかけているのか？

(問いのきっかけ)

善の研究では、統一は生きるための者ではない、とされている。

我々が現実と離れた高き目的を実行するためには、種々の手段を考え、一步一步進まねばならない。手段→客観に調和を求め、客観に従うしかない。手段が見つからなければその目的を変更するしかない。(I-3-3最後から2番目の文章)